

「作品を見たとき、それに対し、なにか気にかかることがあれば、作者に率直に問うべきだ。そこから新たな関係が生まれ、その再生こそが重要である」

作者本人への五年にわたる詳細なインタビューが並べられたという、この展覧会のコンセプトを知ったとき浮かんできたものは、今は亡き陶芸家が私に語ったこんな言葉だった。

ある造形物を見たとき、感覚的に受け取る部分と、どうしても奥の意図を概念的に探り、説明を要求してしまう部分とが交錯しあう。見たままに感じるだけなら、むしろその両者の葛藤は避けられ、深まる機会を失っていることになりはしないか。陶芸家の言葉は、鎮める点もあり、しかし半面疑問としても残った。

「問う」「説明する」とは作品をあまりに「思想的にとらえすぎる危険も意味するからだ。造形美術は感じるものであって、言葉で説明するものではない」と浜田氏は述べるのだが、あえてそ

「浜田知明展—版画と彫刻による人間の探究」に寄せて

肉声が生む核心との出会い

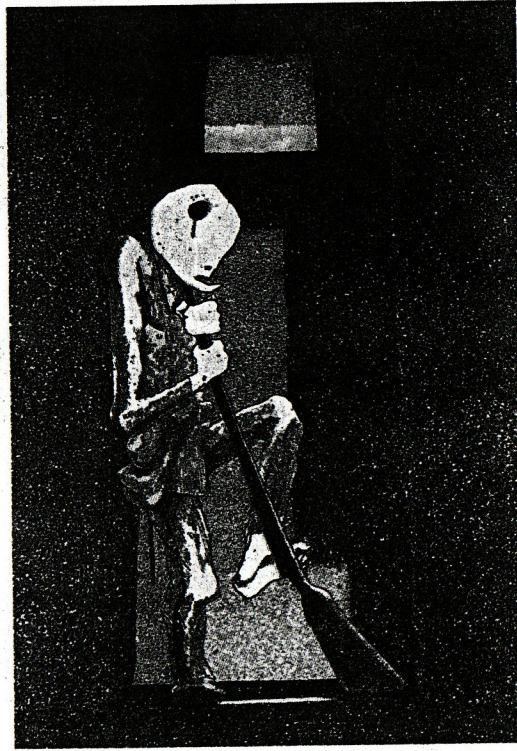
宮本 誠一



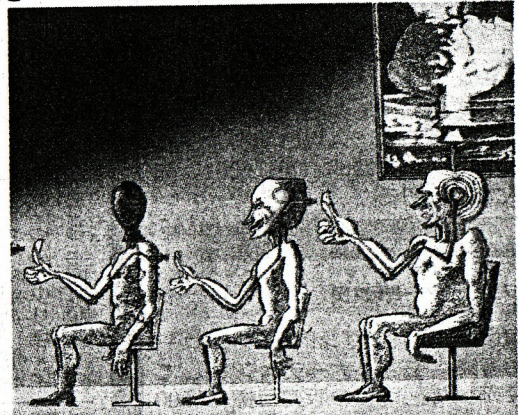
◇みやもと・せいいち
1963年荒尾市生まれ。北九州大文学部卒。小学校教師を経て、一の宮町に小規模作業所「夢屋」を開設。98年「ウォール（II 壁）」で県民文芸賞小説第一席を受賞。阿蘇町在住。

れを破り、この試みをしたのはなぜか。作品展を見たいこうと考えた理由は、考えつづけていた問いへのヒントが隠されていると思っただからである。

美術館で直接、作品群を見ながら感じたこと、それは、そこに添えられたインタビューの新鮮さと、徐々にイメージを制限してくる圧迫感だった。次第にいい加減に読みだし、作品を自由に自分なりに受けとることに重点を置きたしてしまふ。俄にそこには無限の空間が広がり、作品そのも



「初年兵哀歌 (歩哨)」(1951年、238×162mm、エッチング、アクワチント)



「ボタン(A)」(1988年、325×325mm、エッチング、アクワチント)

るのは、無駄のない骨格を持つ作品への作者の自信と飾らない人柄からも生まれているのだろ

う。

さらに、言語と造形との関係をまぎまぎと見せつけるのは、例えば「ボタン(A)」だ。

最初のボタン

のが作者を超え語りだす。ところが私の意識は混乱してきた。それでも浜田氏の作品は、作者の言葉にふり向かせてしまふ。それはなぜか。一言でいえば、氏の作品と人間の存在を原形にまで掘り下げたモチーフとシンプルさとにむすびついた、簡潔でありながら的確に自己意識をとりえる言葉の真実性に答えはあるように思う。

作品展だけでなく、図録にも、実に二百二十点に及ぶ作品と作者のコメントが収録されている。涙が流れているんですが、これで絵が甘くなるんじゃないかと随分迷いました。何日もとちらかに決まったら腐食しようと思っただけでもポロリと二つ置きたかったんです。『初年兵哀歌(歩哨)』をめぐると一節である。制作過程を明らかにすることは、作品の背後に潜んだ謎の濃度を薄くする可能性がある。それを承知で随所に生の言葉が散りばめられてい

る。その先は茸雲が描かれている。ある程度年齢を行った者なら、これまで生きた社会性の中で説明をつけてしまふ。だが子ども、というか、まだ言葉をもたぬ人間が見たりどうか。もしかすると皆ぶつけてガッポーンをぶつけている姿と映るかもしれない。そこに、「結局作品と作者のコメントが何百号のキャンバスに描いたって絵にならないわけだ、最後に行き着いたところがこいつのこと」という作者の飄々とした言説を知ることで、改めて芸術の存在の意味に立ち返らせるのだ。

この発想の意外性、核心との根底での出会いこそ、あの陶芸家の言った再生の場ではなかつたか。

作品と作者の肉声によって、作品を目の前にした人間の個々の内部に、より深い

い話が誕生する。そんな創造的な場をつくりだそうと、今回、今回の作品展の試みは大きいと思う。

※「浜田知明展」は十一月十一日まで熊本市二の丸の県立美術館本館にて。